

マダム貝聞録



No. 6 フィジーの若者事情 藤井由佳(協同総合研究所)

学校を卒業して就職すること、それは人生の大きな節目のひとつだ。それまでの「学ぶ」という体勢が、「働く」という動きに変わる。自分の心の持ちようも変わるし、何よりも周りの環境が変わる。そのように考えると、一番問題を抱えやすい時期というのは、自身の将来を考え始める頃から働くことに慣れる頃までなのだろう。若者はちょうどその時期を生きている。

しかし、物事は深刻に考えようとするといくらでも深刻になり得るものだと思う。日本の“若者”が抱えている問題も、考えれば考えるほど内容が多岐に渡り、奥深くなっていく。フリーター、ひきこもり、ニート、日本の若者はこんなに苦悩しているのか。そう思いながら、ふとフィジーの“若者”について考えた。彼らは苦悩していたのか。フィジー社会全体で考えなくてはならない問題はあったのだろうか。フィジーの人々があまり考えていないだけで、本当は深刻な問題もあったのかもしれない。ちょっと考えてみようと思う。

フィジーの若者事情

フィジーの若者が将来を考え始める時期は、学年で言えばForm 5～6(高校2～3年生)である。年齢で言えば、留年や休学をする生徒もいるのでばらつきがあり、17～23歳となる。彼らはForm 5(高校2年生)になるまでに、3回の進級テストに合格しなくてはならない。1回目、2回目はなんとか頑張ったとしても、3回目ですみずく生徒がいる。そして、Form 6(高校3年生)修了時に4回目の進級テストがあるが、このテストに合格する生徒は本当に少ない。私の赴任校では、毎年の合格率が30%未満である。大

学へ進学するためには4回目の進級テストに高得点で合格することが求められ、そのような生徒は一握りしかいないため、大部分の生徒は高校を終えたら社会に出ていく。

学校における進路指導

Form 5やForm 6では、「キャリア」と呼ばれる進路指導の授業が週に一時間設けられている。将来のことを考えたり、履歴書を書いてみたり、面接について学んだりする。また、教育省主催の進学・就職フェアが各地で開催されている。場所は比較的規模の大

きな学校で、企業や官公庁が教室を自分たちのブースにし、生徒に事業案内をしたり、資料を配布したりする。私も生徒と一緒に何度か参加した。カラー写真入りのパンフレットやステッカーなど、いろいろなものがもらえるので見て回るだけで楽しい。各ブースでは、実際にその企業や官公庁で働いている職員が案内をしてくれる。応募条件の説明もある。聞いてみると、どこもForm 6 修了時の4回目の進級テストは最低合格していなければいけないと言う。女子生徒に人気のある看護師になりたいなら、理科の科目は高得点を取らなくてはいけなとか、男子生徒に人気の軍隊に入隊するためには、英語ができなくてはいけない、など。しかし、うちの生徒たちは、その進級テストに合格することができない。合格率30%、しかも、早い時期にあきらめて試験を受けなかった生徒は数に入っていない。憧れのソルジャーが、世界の国々へ行ったことや訓練のことをおもしろおかしく話してくれるのを目を輝かせて聞き、「よし、勉強を頑張るぞ。」と決意を固めている彼らを見るとうれしくなるが、三歩あるいたらすぐに忘れるのん気な彼らのことなので、ちょっと信用できない。

学校卒業後の進路

進級テストに合格した生徒は、次の進路を前向きに考え始める。大抵は学ぶ意欲をまだ持っているので、医療や教育、農業、ケータリング、服飾などの専門学校に行く者が多い。大学はやはり狭き門で、学力も資金も必要になる。奨学金制度もあるが、非常に高い学力が求められる。

しかし、教育機関はあっても、その後の職がフィジーにはない。地元企業なんてほと



フィジー各地で行われる高校生のための進学・就職フェア



憧れの軍人の方に話を聞く生徒。彼らの制服はとても格好が良い。男子生徒に人気のある軍隊入隊だが、女子生徒のなかにも興味を持つ者はいる。写真の生徒は女の子。



観光ホテルでフィジーの伝統的なダンス“メケ”を披露している若者。彼らはもともと私の赴任校に通っていた生徒。一番右の彼には数学を教えた。学校の勉強よりも、世界中からフィジーを訪れる観光客を楽しませるほうが面白くなったのだそう。彼が仕事をしている様子を何度も見たけれど、とてもいきいきとしていた。

んど存在しない。身近にある職業としては、軍人、警察官、教師などの公務員か、観光ホテルの従業員（パートタイム）、タクシーやバスの運転手、野菜マーケットの売り子、ラグビー選手。世界を股にかけるラグビー選手は夢のまた夢で、地域ごとのクラブチームに所属している選手は大勢いるが、給料は支給されていない。さすがに首都では官公庁や銀行、外資系企業、スーパーマーケットなど、賑やかではあるけれど、高い地位にいるのは外国人、またはフィジー系インド人だ。

進学・就職をあきらめた若者

問題は進級テストに合格しなかった、もしくは、合格をあきらめて早い時期から学校に来るのをやめた生徒たちだ。学校に来ないで何をしているかという、村にいる。ただ村にいるだけ。朝起きて水を浴びて、朝食を食べて、たまに畑の様子を見て、昼食を食べて昼寝して、テレビを見て夕食を食べて、カバ（フィジーの伝統的飲物：マダム見聞録No.5『協同の発見』10月号参照）を飲んで酔いつぶれて眠る。天気の良い日は、隣の村の友達に会いに行ったり、お金のあるときは町へ出てぶらぶらしたりする。ラグビーを一日中していることもある。高校ラグビーのリーグ戦が終わってから学校に来なくなった生徒に久しぶりに会ったら、「おっ、マダムだ。ブラ！マダム。」と普通に言われ、「学校は？」と聞くと、「ラグビーが終わったから学校はもういい。村にいる。」と答えが返ってきた。その理由に飽きれてしまうが、逆に彼の明るさに救われる。

実は、フィジーに行く前は、「開発途上国の子どもたちは、学校に行って学びたいのに、貧しかったり近くに学校がなかったりという理由で学校に行けなくて、大きな木の陰



我が校のラグビーチーム。キャプテンのワカ君は、教室では床で寝ていて怒られてばかりだけれど、ラグビーではみんなに頼られるすごい奴。ラグビーをしていると、どの生徒も格好良く見えるから不思議。



南の島と言えば、フラダンス。でも、フラダンスはポリネシアの踊りで、メラネシアに属するフィジーに腰を振るダンスはない。それでもなぜか、フラダンスは今フィジーの若者に大人気。みんな上手におしりを振る。一応、付け加えるが、一番右の若者はオカマくん。彼の将来の夢はフライトアテンダント。



村にいる若者。村にいたらそれなりにやることはある。ココナッツを採ってきたり、薪を集めたり、おしゃべりしたり。

で青空教室のようなものをつくってみんなが片寄せ合って真剣に勉強している。私はそんな所に行くんだ。子どもたちのきらきらしている瞳を見るんだ。」と思っていた。しかし、それが私の勝手な妄想だったということに気がついた。そのような国は世界のどこかにはあると思うが、少なくともフィジーは違った。彼らは、なるべくなら勉強をしたくないし、学校に行くより友達と町でうろうろするほうが楽しいと思っているし、平気で学校に遅刻したり欠席したりする。基本的には日本の学生と同じなのだ。なかには日本の女子高生みたいに気だるい話し方をする女子生徒もいて、この生徒が日本にいたら、化粧して制服のスカートを短くして、午後の授業をさぼってカラオケに行っている可能性が高いと思った。

それでも彼らを取りまく問題が深刻にならないのは、彼らの持ち前の明るさと、楽しいことがあると斜に構えずに皆で思い切り盛り上がる素直さと、彼らを丸ごと受け入れる「村」がいつもそばにあるおかげだと思う。

若者の娯楽

彼らの娯楽は何か。彼らの趣味は歌うこと。朝から晩まで、授業中も歌っている。一人が歌い始めると、周りも歌い始め、ソプラノ、アルト、テノール、バスのパートに自然に分かれて大合唱になる。みんな歌が上手で、下手なフィジー人には会ったことがない。歌詞はきちんと覚えているし、声量もあるので、彼らにカラオケシステムはいらない。そこで、学校や教会では、子どもや若者を集めてグループをつくり、歌やダンス、

劇、コントなどの発表会をよく行う。チケットを作って入場料を徴収し、学校や教会の運営資金に充てたりしてはいるが、これに参加したり、見に行ったりすることが娯楽のあまりないフィジーの娯楽のひとつになっている。なかには、CDを出して全国を巡業して回る高校生フォークソンググループも現れた。彼らの人気はすさまじく、男子も女子も「真ん中の人がかっこいい」、「いや右側がいい」と騒いだり、彼らが載った新聞記事をノートに貼り付けたりして楽しんでいる。

ほかには、フィジーと言えばラグビー。ラグビーは国民的人気スポーツで、ラグビーをしない男はオカマだと言われる。(本当にオカマくん以外はラグビーをする。)貯金がなかなかできないフィジー人も、ラグビー観戦のためならお金を貯められる。高校対抗のリーグ戦がある季節は、学校も村も盛り上がる。

もうひとつ、彼らにとって最高の娯楽はおしゃべり。これはいつでもどこでもできる。丘の上に座って、道を通る人や車に声をかけながら、何時間でもしゃべっている。ときにはお菓子を食べながら、紅茶を飲みながら、何時間もしゃべる。フィジーの人たちに内緒話は禁物。すぐに広まってしまう。

首都スバにある映画館やマクドナルドのハンバーガーは高嶺の花。お金も特別な場所もない身近な娯楽を楽しむフィジーの若者。夜中まで村間をうろうろ出歩いているのが玉にキズだが、いつも楽しそうに笑っているのが一番だ。



番外編：将来の夢

日本文化を知ってもらおうと企画した七夕まつりで、生徒に「将来の夢」を短冊に書いてもらったことがあった。

将来の夢【フィジー】

- 男子
1. 学校の先生
 2. 軍人
 3. パイロット
 4. ラグビー選手
 5. 経済学者

- 女子
1. 学校の先生
 2. 看護師
 3. 医者
経済学者
 5. 軍人



将来の夢【日本】

- 男子
1. サッカー選手
 2. 野球選手
 3. 食べ物屋さん

- 女子
1. 食べ物屋さん
 2. 保育園・幼稚園の先生
 3. 看護師さん

七夕まつりで飾った短冊。
夢は大きいほど良い。

この結果は私の赴任校の生徒から得られたものだ。都会の高校生に聞くと、学校の先生になりたいと答える生徒はほとんどいない。大学教授や会計士、会社のマネージャーになりたいという答えが多い。

地方に住む生徒たちは、将来の夢として具体的な職業を口にはするが、本当なら何もしないで村でのんびり昼寝をしながら暮らしたいと思っている、と思う。なぜなら、フィジーの気候は一年中暖かくて、主食のタロイモは植えておけば放っておいても育つし、気がつけばミカン、パパイヤ、マンゴーが順番に実をつけている。海には魚がいる。極端な話、食べるものに困らなければ働く必要はないのではないかと。一年のうちに食べ物が増えない時期がないので、蓄えも必要ない。こんな環境で暮らしていたら、おのずと先のことを考えなくなる。

人は、先のことを考えたときに不安になってしまうのだと思う。「こうなったらどうしよう、ああなったらどうしよう。」と自分の想像に対して不安を抱いている。だから、先のことを考えないフィジーの人々は、大きな不安を持たずに、「今」を楽しんでいる。「今が良ければいいじゃん。」という最近よく耳にする、本当はそうは思っていないのに見栄を張って言っている後ろ向きの意味ではなく、もっと前向きで自然な意味で。

日本の将来の夢は、「大人になったらなりたいものベスト3」(第一生命 2003年)から引用した。高校生ではなく小学生が対象だけれども、参考までに。



Vinaka ni Siga ni Sucu!
Merry Christmas!